

旭川医大 病院ニュース



編集 旭川医科大学病院
広報誌編集委員会委員長
廣川博之

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>



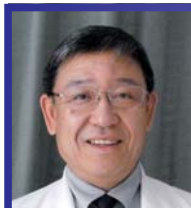
定年退職にあたって

内科学講座 病態代謝内科学分野
教授 羽田 勝計

本年3月末をもちまして、定年退職を迎えることになりました。2003年12月1日付で、旭川医科大学内科学第二講座の第三代目教授として赴任し、12年4か月間勤めさせて頂きました。この間、大きな変革がいくつかありました。まず、2004年4月から初期研修義務化が始まり、研修医として旭川医科大学病院を希望する医師が、以前に比べ激減しました。現在、地域枠入試制度等で持ち直してきてはおりますが、未だ以前の状況には達していない現状です。また同時に旭川医科大学は国立大学法人に移行し、2006年4月には講座再編成により、内科学第二講座は内科学講座病態代謝内科学分野となりました。私の赴任以前から、当講座は、糖尿病・内分泌・リウマチ・膠原病・消化器(肝胆膵)を担当しており、現在も変わっていません。入局者も大幅な減少なく推移し、教室員は各々の専門領域の教育・診療・研究活動に励んでいます。

私自身の専門分野は糖尿病であり、北海道大学・札幌医科大学を含めた道内三医育機関に糖尿病を専門とする教授がおられなかったことから、旭川だけでなく、北海道全体で、糖尿病の診療・研究・啓発の核として働きたいと考えておりました。この目標はある程度達成できたのではないかと考えております。研究面では、基礎研究だけでなく、ランダム化比較試験やコホート研究など多くの臨床研究も行うことができました。特に旭川市近隣の医療機関にご参加頂いたAsahikawa Studyは、5年間の観察期間を終了し、解析に入っています。また、主に糖尿病関係の学術集会を開催する機会も得ました。今後は北海道を離れ、近畿地区で糖尿病に関する活動を続けていく所存です。

旭川医科大学病院では、多くの医師・医療スタッフ・事務系職員の皆様に支えられ、職務を全うできたと考えております。本紙面をお借りし、心より御礼申し上げます。同時に、旭川医科大学病院の今後益々の御発展、及び皆様の御活躍・御健勝を祈念いたします。長い間大変お世話になり、誠に有難うございました。



定年退職にあたって

歯科口腔外科学講座
教授 松田 光悦

旭川医科大学病院の皆様、平成28年3月をもちまして定年退職となります。昭和55年4月、大学卒業と同時に旭川医科大学付属病院歯科口腔外科にお世話になりました。以来、他病院への出向、留学などで2年10ヶ月ほど本院を離れた時期がありましたが、ほぼ34年間、旭川医科大学病院で勤務させて頂きました。平成16年10月からは歯科口腔外科学講座の教授として勤めさせて頂き、その間、いくつかの委員会委員長、運営担当副院長として入退院センター長や地域連携室長などをさせて頂きながら多くの先生方、看護師や各医療職そして事務の皆様のご協力とご支援を頂き、何とか業務を遂行させて頂きましたことに心より感謝申し上げます。

私が歯科医師として口腔外科を研修し始めた昭和55年当時は、全国的に口腔外科という診療科の知名度が低く、当時の新設医科大学付属病院によりやうく診療科が設置された時期でありました。歯科医師が、手術室において全身麻酔下の手術を行い、病棟での入院管理

を行うということが、周囲には珍しいことであったと思います。口腔外科の診療をポピュラーなものにするために、初代北進一名誉教授の指導の下、院内各科、各部署と円滑な連携をさせて頂き、またいろいろ学ばさせて頂き今日に至っております。この間、口腔外科専門医を取得する若手歯科医師が多く育ってきましたが、これは当科での教育だけでなく、各診療科医師、看護師をはじめ各医療職の皆様が、当院の若手歯科医師を厳しくも暖かく育て頂きましたお陰と思い、感謝致しております。

今、我が国は超高齢社会となり、医療は大きく変化していこうとしております。その中で、歯科医療は「患者の生活を守る医療」と位置づけられ、医科歯科連携における医療の推進が厚労省、文科省双方から提示されております。

旭川医科大学病院は、この地域において、地域住民の「命を救い、生活を守る」医療を真摯に展開し、そのための医療人をしっかりと育てることが使命とっております。その結果、地域に根ざし、世の中のリーダーシップを取っていく大学病院に発展していくものと信じております。今後のますますのご健闘、ご活躍を祈念いたします。

長いことお世話になりありがとうございました。



退職にあたって

看護部長 上田 順子

昭和52年春、「新設医科大学でがんばりなさい。」と、看護学校教員にエールを送られ、同期11人で旭川の地に参りました。広大な水田地帯に建つ白壁の大学病院は、とても新鮮で勇壮でした。就職時は西病棟しか完成しておらず、東病棟のベッド搬入や業務基準の作成など先輩達と一緒に整備していきました。創成期の「目標に向かって職員が一つになる」という経験は、その後の組織運営の礎になりました。看護師長時代にICUを一時閉鎖する程の深刻な看護師不足がありました。思うように患者さんに看護ができない、検査・治療の介助ができない等のジレンマの中で、次々と仲間が病院を離れていきました。「患者さんが第一」はもちろんですが、同じ位に「職員も大切な存在」であることを教えられた時代でした。

平成14年4月、新井多美子看護部長の後任として4代目看護部長・副病院長を拝命しました。副看護部長時代から担当していた病棟再開発は第二期工事に入っていました。また、病院機能評価受審、病院情報システムの更新、救命救急センター設置と二次救急24時間受け入れ、国立大学法人化、「7:1看護」実施等々、大学病院として大きな変革の時代であり、看護部も時代の要請に呼応すべく、適正な人員配置、人材育成、業務改善、

働き続けられる職場づくり、地域との連携に力を入れて参りました。特に、看護師確保対策の取り組みでは病院長を中心としたプロジェクトチームの活動、総務課の協力による全看護職員アンケート調査、大学教職員挙げての募集活動等により「7:1看護」が実現しました。現場の看護職員の声が大学の制度や仕組み作りに反映されたことで、“良い病院を創ろう”という一体感が生まれました。また、二輪草センターの様々な活動により、復職、子育て支援が充実し、結婚・育児による退職は激減し、働き続けられる職場作りが確立しました。さらに、入退院センターでのケアマネジメントやベッドコントロール、病棟での退院支援、認定看護師や特定行為研修修了看護師の活動など多職種との協力体制のもと看護の役割が拡がりました。歴代の学長、病院長はじめ、各診療科や中央部門、事務部門等の皆様に支えていただき心より感謝申し上げます。

今後は、地域との連携を深め、退院後の患者さんの暮らしを支援する体制を整え、看護職として役割を發揮することを願っています。

病院ライブラリーは、開設10年目を迎え、多くの患者さんやご家族にご利用頂いています。また、ボランティアさんの活動や様々な提案により、ホスピタリティーが拡がりました。患者サービス向上に尽力して頂いた多くの皆様に感謝の気持ちで一杯です。

最後に、これまでのご支援、ご協力に感謝申し上げますとともに、皆様のご健勝と旭川医科大学病院の発展を祈念致します。



手術部副部長 就任にあたって

手術部副部長 黒澤 温

職員の皆様には日頃より大変お世話になっております。平成27年12月1日付で手術部副部長を拝命いたしました。

私は、平成13年旭川医科大学を卒業し、旭川医科大学麻酔・蘇生学講座に入局し、主に臨床麻酔・心臓麻酔を中心に麻酔診療を行ってきました。手術室の麻酔科医として、手術部門システムのORSYS(オルシス)の平成16年の導入、平成26年の更新等の開発に関わることができ、非常に貴重な経験をさせていただきました。ORSYSは、電子記録装置であり、正確性、効率等が求められます。特に、記録等の効率を求め、より患者様に接する時間を多くできるように、今後も、ORSYSの開発に関わることができれば幸いです。

旭川医科大学病院の手術室は、おおよそ年間手術件

数7000件(麻酔科管理5000件)を行っており、1病床あたりの手術件数は全国の国立大学病院の中でも、トップの件数を誇っております。これだけの件数を安全に行えているのは、手術室のスタッフ、各診療科の医師、看護師、コメディカルのスタッフなど多くの職員の協力のおかげだと思います。また、旭川という北海道の地域において、「手術」という需要もそれだけあるということだと感じます。多くの手術件数を行いながら、安全に質の高い医療を提供できるよう、手術部の運営、システムの改善等を行なっていきたいと考えております。

手術室は、患者様や患者様の家族からすると、行っている診療がみることができず、閉鎖さえた空間に思われる部署かと思っております。そのような部署として、各診療科の医師、各病棟、各部署との連携しっかり行い、安全な手術が行えるよう、そして、患者様、患者様の家族が安心して手術が受けられるようスタッフ一同さらなる努力していく所存でおります。今後とも皆様のご指導、ご協力のほどよろしくお願い致します。

FRESH VOICE

臨床検査技師として

臨床検査技師として昨年4月より旭川医科大学病院に勤務し、もうすぐ1年が経とうとしています。少しでも早く仕事を覚えることに必死だったためか、あっという間の1年でした。

臨床検査技師の業務内容は、血液、生化学、微生物、輸血、生理検査や病理検査など多岐にわたります。当院の臨床検査・輸血部においても、様々な部門に分かれて検査業務を行っております。私は現在エコー検査を中心に、採血業務や休日勤・夜勤業務をさせていただいております。大学時代に学んだ様々な検査の中でも、大学の教授が熱心に講義をしてくださった心エコー検査は、奥深さや楽しさを感じることができ、私が魅力を感じた検査でした。私はもっとこの分野のことについて知り、勉強したいという気持ちを抱いていましたので、心エコー検査に日々携わることができ、充実した毎日を過ごしています。私は大学を卒業後、1年間札幌の病院に臨床検査技師として勤務していました。しかしながら現在担当する検査業務は多岐にわたり、学生時代に

臨床検査・輸血部 長多 真美



学んだことや1年目に覚えた知識や経験、技術では不十分であることを実感します。また、社会人としても医療人としても、より成長しなくてはならないと考えています。

私の周りには、知識や経験が豊富な先生や先輩技師の方々が居てくださり、業務内容や医学的知識、社会人としてあるべき姿など様々なことを教えていただいております。また勉強しやすい環境があり、様々な勉強会にも参加させていただいております。この恵まれた環境に感謝し、1日でも早く一人前の臨床検査技師になり、診療科の先生方や患者様に少しでも貢献できるように、日々努力をしていきたいと思っております。

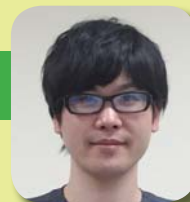
最後になりましたが、病院スタッフの皆様には今後様々な場面でお世話になる機会があると思っております。まだまだ至らないところが多い私ですが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

臨床検査技師になって

旭川医科大学病院に臨床検査技師として勤務し2年が過ぎようとしています。毎日が勉強の日々であっという間に過ぎていきます。臨床検査・輸血部は、生化学、血液、一般、輸血、細胞分析、微生物、生理検査部門に分かれて検査業務を実施しています。新人は、最初の2か月は夜勤のために生化学、血液、一般、輸血検査をローテーションし、その後、各検査部門に配属されます。夜勤は1人体制で、初夜勤のときは心細さからかとても緊張し、どっと疲れたのを昨日のように覚えています。その後、生化学検査業務を学び、現在は血液・一般検査に配属され、検査業務を実施しています。

血液・一般検査をはじめとする検査の多くは分析装置を使用し、血液像や尿沈渣といった顕微鏡で細胞を観察する検査は、検査技師が鏡検しています。学生の頃、検査の多くは分析装置に任せ、鏡検など技術を要する検査に集中するものと思いましたが、働いてみると分析装置のメンテナンスや精度管理を行う機会が多いことに驚きました。これは正しい検査結果を臨床に提供するためであり、分析装置

臨床検査・輸血部 斉藤 史頼



を適切な状態に保つための業務も検査技師の重要な仕事の1つであることを学びました。

また、血液像や尿沈渣の鏡検は難しく、正しく細胞を鑑別して異常を見逃さないためには、知識と技術、そして多くの経験を積まなければなりません。鏡検をはじめると、自分の知識不足、経験不足を痛感しました。そのような時、経験を積んだ先輩方が優しく教えてくださり、わからないことや不安を解消することができました。一人で検査値や所見を報告するようになりましたが、まだ未熟で失敗もしてしまいます。知識や技術を磨き、失敗を繰り返さないように考え、改善できるよう日常の検査業務に取り組んでいます。検査業務を通して、臨床に正しい検査結果を提供することで、臨床の皆様信頼される検査技師を目指し、これからも精進していきたいと思っております。

最後になりましたが、臨床検査・輸血部スタッフをはじめとする職員の皆様には、今後ともご指導よろしくお願い申し上げます。

旭川医科大学病院 リハビリテーション部に入職して

平成27年10月1日よりリハビリテーション部（以下、リハビリ部）に入職致しました。理学療法士の岡村綾子（りょうこ）と申します。私はH21年に千歳リハビリテーション学院卒業後、帯広の北斗病院に勤めました。そこでは、小児から成人までさまざまな年齢の患者様を担当し、多岐にわたる分野の急性期から回復期・慢性期のリハビリテーション（以下、リハビリ）に携わってきました。その中でも特に小児分野に興味があったことから、地域に密着した発達支援の小児リハビリを学びたく思い、旭川市内の母子通園施設わかくさ学園へ転職し、そして小児急性期がある旭川医科大学病院へ転職し現在4ヶ月目となりました。

旭川医科大学病院のリハビリ部は、「臨床・研究・教育」を3本柱に掲げ努力しています。大学病院の役割としては、効果のある最先端のリハビリを患者様に提供することです。そのために、リハビリ部スタッフ全員で毎週Case Studyや英文抄読、月1回

リハビリテーション部 岡村 綾子



の研究進捗状況報告会議を行い、そして学会発表や論文執筆なども積極的に行っています。また、旭川市民の健康のため市民公開講座で講演し、メディカルサポートのメンバーとしてスポーツ分野で活躍しているスタッフもおり、地域貢献にも力を入れ、旭川から全道全国へと活動を広げています。

現在私は、臨床経験が6年とまだ浅くわからない事が多いです。大学病院であるため珍しい疾患の患者様もいらっしゃり、多くの知識と技術が必要ですが、リハビリ部は、経験豊富な諸先輩方の指導を受けられ、向上心のあるスタッフに刺激を受けながら学べる環境だと思っております。今後は、研究にも力を入れ、今までの経験を活かし小児分野で貢献できたらと思っています。ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。

スポーツへ積極的な支援を行うスポーツ医科学研究委員会の紹介

東京オリンピック招致が決定し国の要請を受けて、全国の大学では国民へのスポーツと国際交流の啓発に関する様々な取り組みを始めました。旭川医科大学では、以前より自主的に地域および国際的なスポーツ活動の支援に貢献していましたが、正式な組織がありませんでした。そこで、2014年11月19日に松野理事・副学長（当時病院長）のもと、スポーツに関する研究を行いその研究成果と最新のスポーツ医学の知識を広く社会還元するために、「スポーツ医科学研究委員会」が組織され様々な活動を行っています。スポーツは障がいの有無を問わず人類が共通・平等に楽しむことができ、健康を維持するうえでも大切なもの donc、医科大学が取り組むことは意義が大きいのです。

①委員会の構成

スポーツ医学には様々な分野があります。怪我や病気に対応する臨床医学。スポーツの研究、トレーニング理論や栄養学・薬学と密接な関係にある基礎医学。そして、今後注目されるスポーツ看護学。これらのスペシャリストを含む総勢12名で構成されています。

②委員会の目的と目標

旭川医科大学は、健康運動から競技スポーツまでの広い分野のスポーツ愛好家のニーズに合わせた最先端のスポーツ医学を提供し社会貢献することを考えています。一般診療の場だけでなく、講演・授業、練習現場や大会会場など場所を問わず対応する事を目指します。

③今までの活動

委員会発足直後に、障がい者クロスカントリースキーの日本チームから依頼がありました。障がい者スポーツでは障がいに応じて「クラス分け」をする必要がありますが、日本にはクラス分けが出来る有資格者がいないという問題がありました。そこで、クラス分けの状況を理解し勉強するために整形外科と眼科の医師がフィンランドに視察に行き資格取得の準備を始めました。他種目においてもクラス分け資格者を育成したいと考えています。また同競技のワールドカップが2015年2月に旭川富沢にて開催され、旭川医大から大会ドクター、ドーピング検査員補助、そして大会運営学生ボランティアを派遣しました。同時期にスポーツ医学に関する市民公開講座も開催しました。現在、障がい者スポーツの複数競技団体との協力体制を構築中です。また北海道各地の部活動に対して医師・理学療法士が怪我を未然に防ぐための帯同を行っています。

④今後の活動

今までの活動に加え、今後国際大会に帯同・協力する医療関係者を育成するため国際レベルのスポーツ医学教育・研究を行い、その経験を活かして地域住民に最良のスポーツ医学に触れる機会を提供したいと考えております。



2015年2月旭川富沢で開催された障がい者クロスカントリーワールドカップ 医大学生ボランティアの活動



2015年2月市民公開講座



2015年10月 障がい者文化スポーツの集い 医大職員実行委員として参加

ベトナムベンチェ州での 医療活動報告

手術部ナースステーション 玉置 渉

私は2015年12月23日から31日までの8日間の日程で日本口唇口蓋裂協会が主催するベトナムでの海外医療援助に参加させていただきました。そこで私は、旭川医科大学病院チームの手術室看護師として主にチームで行う手術の器械出し看護と外回り看護を担当していました。手術を行ったベンチェ州のグエンデンチュウ病院や宿泊していたゲストハウスでは現地の方々に温かく迎えていただき、この医療援助が、現地の人々にとって大切な活動であることを感じました。

実際の活動は、手術を受けたいと受診してきた全ての患者様を初診で手術の必要性を判断し、手術に必要な検査等を1日で行い、4日間の手術日を設け口唇形成術、口蓋形成術を中心に60件程の手術を実施しました。また手術日以外では過去に口唇口蓋裂の手術を受けた患者様の御宅訪問や、養護施設等へも訪問を行い、充実した活動内容でした。

ベトナムでの手術は日本のように物資や設備が十分に整っていない状態でした。しかし、活動に参加した皆が限られた条件の中で最良の医療を目指して話し合い、実践していく姿は医療職者として、忘れてはならない姿勢であると改めて感じました。

日本口唇口蓋裂協会ベトナム ボランティアに参加して

麻酔・蘇生学講座 佐古 澄子

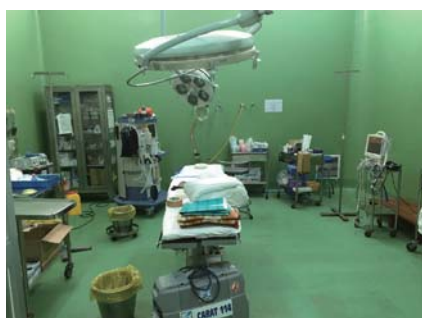
2015年12月23日からの9日間、日本口唇口蓋裂協会主催のベトナム ベンチェ省での医療支援活動に初めて参加してきました。ベンチェ省はベトナム戦争で枯葉剤の被害を強く受けた地域の一つです。活動内容は口唇口蓋裂を中心とした先天疾患症例に対する無償手術で、全国各地から医療スタッフが参加しています。当院からも歯科口腔外科松田教授を中心に毎年参加している活動です。23日深夜に現地に到着し、翌日朝から早速資材を荷ほどきして手術室の準備に取りかかります。午後からは夜まで術前診察を行いました。活動日数が限られているため手術を受けられる患者さんは40名程ですが、100名を超える手術希望患者さんが集まっていました。翌日からは朝7時から夜まで手術になります。日本での口唇口蓋裂手術の多くは幼児期までに行われますが、今回ベトナムでの手術症例は2ヶ月の子供から50代の成人まで様々でした。麻酔に関しては、普段の日本での診療と比較して薬剤・モニターの種類が少なく、戸惑うことも多々ありましたが、その分患者さんをよく見て診察するという原点に帰って医療を行った数日間でした。現地の医療スタッフと交流する機会もあり日本国外での医療を間近にできる貴重な体験をさせていただきました。



▲麻酔準備中の
佐古先生



◀左から竹川先生、
玉置さん、松田先生



▲到着後に整備した手術室です



◀12月の
ベトナムベンチェ州
グエンデンチュウ病院
手術棟玄関

退院支援看護師育成セミナーを開催しました

地域医療連携室 継続ケア担当看護師 古澤亜矢子、浅野弘恵、鈴木悠希江

継続ケア担当看護師は、患者さんへの相談支援の他、院内看護師を対象とした退院支援に関するセミナーも行っています。例年は2回シリーズのセミナーを開催していましたが、今年度からは「退院支援看護師育成セミナー」として、5回シリーズのセミナーに発展させました。

当セミナーは、病棟での退院支援におけるリーダー的な役割を担う看護師の育成を目的としているため事前登録制としましたが、第1回と第3回の内容は、すべての看護師が基礎知識として必要な内容と考え、全看護師を対象としました。最終回では具体的な退院支援の展開をグループディスカッションすることで、実践

的かつ即戦力につながる構成としました。

アンケートでは「介護保険サービスは参考になった」「グループワークを通して退院支援のイメージがついた」「今年出られなかったセミナーは、次年度参加したい」「セミナーで学んだことを病棟の退院支援に活かすことができている」などの評価を得ています。

地域支援者との直接の交流や他病棟の退院支援について共有することは、日常の業務の中では得ることができない機会であり、新たな視点にも繋がると考えています。今後、セミナー修了者が病棟内で退院支援看護師としての力を発揮してくれることを期待し、来年度以降も継続していきたいと思います。



日時	テーマ	参加人数
第1回 7月30日(木)	「地域包括ケアとは」 旭川医科大学医学部看護学科地域看護学教授 藤井智子氏 「退院支援の3段階プロセス」 地域医療連携室 継続ケア担当 看護師 浅野弘恵	63名
第2回 9月9日(水)	旭川医科大学病院の退院支援の流れと病棟看護師の役割 地域医療連携室 継続ケア担当 看護師 浅野弘恵 【グループディスカッション】病棟看護師の役割を考える	33名
第3回 10月15日(木)	介護保険サービスを知ろう！ 神楽・西神楽地域包括支援センター所長 今井 敦氏	82名
第4回 11月17日(火)	訪問看護師に聞きたい、知りたい、こんなこと 訪問看護ステーション北彩都所長 塚本悦子氏 【グループディスカッション】事例を通して訪問看護との連携を考える	33名
第5回 2月2日(火)	退院支援看護師の役割 【演習】事例を用いて具体的な退院支援の展開を学ぶ	34名

薬剤部 新薬紹介(69) ボノプラザンフマル酸塩(タケキャブ[®]錠)

酸分泌抑制薬は、プロトンポンプ阻害剤 (PPI) と H₂受容体拮抗剤が代表として挙げられるが、2015年2月、カリウムイオン競合型アシッドブロッカーと呼ばれる新たな作用機序のPPIが加わった。ボノプラザンフマル酸塩 (タケキャブ[®]錠) である。

従来のPPIは壁細胞に存在するプロトンポンプを標的とし、壁細胞中の分泌細管内で酸による活性化を経て効果を発現する。酸性条件下では不安定であり、十分な効果が得られるまで数日の時間を要する。本剤も従来のPPIと同様に壁細胞のプロトンポンプを標的とするが、酸による活性化を必要としない。酸性条件下で安定であり、効果の発現が速やかである。本剤の代謝は主にCYP3A4が関与しており、遺伝子多型のあるCYP2C19の関与はわずかである。主な薬物肝代謝酵素がCYP2C19である従来のPPIと比べ、血中濃度の個体差が少ないというのも特徴の一つである。

速やかで優れた酸分泌抑制作用を持つ一方、ボノプラザン塩酸塩では従来のPPIと比較して、より高頻度

の高ガストリン血症を引き起こすことが知られている。胃内pHの上昇に伴うフィードバック作用により血中ガストリン濃度が持続的な高値をきたすと、胃粘膜の神経内分泌細胞が過剰に刺激され、カルチノイド腫瘍へ進展する可能性がある。1年間の連続使用成績ではカルチノイド腫瘍などの発生は報告されていないが、今後、長期使用による安全性の検証が必要である。

用法・用量についても特徴的な点がある。逆流性食道炎の場合「1回20mgを1日1回 8週間まで」投与可能であるが、再発・再燃を繰り返す逆流性食道炎の維持療法では「1回10mgを1日1回」を投与し、それでも効果不十分の場合にのみ「1回20mgを1日1回」へ増量ができる。つまり維持療法を開始する場合には、10mg投与を経ずに20mg投与を行うと保険適応外になってしまう。逆流性食道炎における本剤の投与の際には投与方法についても再確認が必要である。

(薬品情報室 佐藤 宝)

臨床検査・輸血部発 「院内外への検査の発信」

いつも適正な検査にご協力頂き、ありがとうございます。

当臨床検査・輸血部の活動は、検査室内における日々の検査業務ではありません。私たち臨床検査技師は、検査のエキスパートとして病院内外での教育活動にも力を注いでいます。具体的に、院内医療従事者に対しては、臨床検査分野についてより理解を深めていただくことを目的とし、採血管取り扱いに関する研修、血液製剤の取り扱いに関する研修を毎年医療安全管理部と共同で取り組んでいます。講演後のアンケートでは、「知識を習得できた」「手順を再確認できた」などのご好評をいただきました。さらに、看護師初任者研修での指導や、要望があれば病棟へ出張研修も行っています。また、一般市民および患者に対しては、臨床検査データを理解し役立てていただくことを目的とし、ほっとピアセミナー、糖尿病教室、肝臓病教室に講師として参加しています。皆様は、11月11日「臨床検査の日」をご存知でしょうか。臨床検査・輸血部は、毎年11月11日に院内で検査展を開催し、臨床検査技師の存在および検査への関心を深めていただけるよう取り組んでいますので、ぜひ足を運んでみて下さい。

このように、医療従事者、一般市民および患者に臨床検査・輸血分野における教育、研修を進めることは、

地域住民の健康増進、医療サービスの向上に寄与すると考えています。今後も臨床検査・輸血部一同、よりよい医療に貢献できるよう取り組んで参りますので、皆様からの変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(臨床検査・輸血部 黒瀬瞳)



看護部 平成27年度継続教育「在宅療養支援研修」を実施して

看護部教育委員会 黒崎明子

今年度新規に在宅療養支援研修を実施しました。平成27年11月9日、11月12日に市内2か所の訪問看護ステーションに4名の看護師が研修に行きました。旭川医科大学病院を退院後、訪問看護を受けている利用者さんのご自宅へ訪問看護師と共に訪問しました。この研修は、本院の看護職員が地域での暮らしを見据えた看護を提供できる能力を育成することを目的としています。参加した看護師は、6階東ナースステーション 関本泰子さん、6階西ナースステーション 井上朋美さん、7階東ナースステーション 佐々木沙也加さん、9階東ナースステーション 田端彩那さんです。研修後、2月16日に看護学科棟大講義室にて報告会を開催しました。訪問看護ステーションの所長さんをはじめ、看護職員が数多く参加しました。施設の概要、1日の流れ、訪問事例、連携の実際等が報告されました。今回の学びの一部を紹介します。

- ・退院支援として内服管理や指導を行っていたが、具体的な生活の場のイメージが不足していたと感じ、患者さんを生活者の視点で捉えることの重要性を感じた。
- ・入院中、在宅療養が難しいと思うような方でも、自宅では生き生きと生活しており、改めて家という環

境、家族の存在の大きさを知った。

- ・病院という場では、治療や安全が第一優先となるために患者や家族の強みを十分に引き出せていないこともあるのではないかと考えた。
- ・訪問看護師は、とても丁寧に利用者として看護を実践していた。複数の患者が存在する病棟とは環境が異なるが、自分の看護を振り返ったときに同じように常に丁寧に患者と関わっているだろうかと感じ、意識するようになった。

今後、研修で得たことを具体的な自宅での生活、地域での暮らしを見据えた看護実践につなげ、各部署の退院支援の推進役となることを期待しています。



在宅療養支援研修報告会の様子

平成27年度 患者数等統計

(経営企画課)

区分	外来患者延数	一日平均外来患者数	院外処方箋発行率	初診患者数	紹介率	入院患者延数	一日平均入院患者数	稼働率	前年度稼働率	平均在院日数(一般病床)
	人	人	%	人	%	人	人	%	%	日
10月	33,414	1,591.1	95.4	1,358	78.5	15,916	513.4	85.3	86.2	12.2
11月	29,977	1,577.7	95.6	1,291	80.0	15,714	523.8	87.0	86.0	12.6
12月	30,564	1,608.6	95.0	1,140	78.9	16,075	518.5	86.1	83.1	12.6
計	93,955	1,592.5	95.3	3,789	79.2	47,705	518.5	86.1	85.8	12.5
累計	285,087	1,566.4	95.1	12,055	77.8	142,789	519.2	86.3	83.7	12.6
同規模医科大学平均	211,498	1,159.0	90.8	11,998	78.8	140,290	510.1	83.7	83.1	14.5

編集後記

昨年の4月に2年間の他機関勤務より戻ってきたと思ったら「広報誌編集委員をお願いします。」と言われ、何もわからぬまま「病院ニュースってこうやって作ってるんだあ」と感心しながら既に1年が経過しようとしています。

振り返るに、今年度は旭川医科大学にとって忍耐の年でした。収益増と費用削減に真正面から取り組み、病院ニュースも1回分を泣く泣く削減(?)して合併号を発行したりと、職員の皆さんの様々な努力の甲斐あってか経営改善も軌道に乗ってきているように聞いています。来年度も安穏としてははいられませんが、少しは明るい光も見えて来るのではないのでしょうか。

そういえば先月は29日までありました。今年8月にはブラジル・リオでのオリンピックがありますね。日本代表、特に体操とサッカーの活躍が楽しみです。そしてその次は2度目の東

京オリンピック。もしかしたら2026年札幌冬季大会と期待は膨らみます。2026年は定年後なのでゆっくり観に行こうっと。(経営企画課 山村 賢司)

時事ニュース

- 1月14日 (木) 病院立入検査 (医療監視)
- 1月21日 (木) 国立大学附属病院長会議「東北・北海道地区会議」開催
- 1月26日 (火) 精神科病院実地指導の受審
- 2月27日 (土) ~ 2月28日 (日) 緩和ケア研修会 (旭川市市民活動交流センター-CoCoDe)
- 3月25日 (金) 学位記授与式